The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イギリスの文化政策と都市再生プロジェクト
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 114-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

イギリスの文化政策と都市再生プロジェクト

吉村典子／宮城学院女子大学

「文化政策」という言葉には，国家の威信の誇示や国のアイデンティティーを確立させるための，例えばかつてのナチやスターリンの時代の政策を想起させ，また，その「政策」という言葉が，国家や政府主導によるものというイメージを与える。歴史上，そのような意味を内包したとはいえ，今日では，公・民の様々な組織・団体が，市民社会の生活価値の充足をめざして掲げた方策を意味する。特に近年の産業構造の転換にともない，枯渇化した街を再生するプロジェクトにおいて，様々な文化政策の試みがみられる。

19世紀を中心に急速に発展したイギリスのかつての工業都市は，現在，文化政策を導入した都市再生の手法をみせている。産業革命後の19世紀は，鉄鋼業・織物業に代表される製造業が進展し，水上の交通を利用できる海や川のある街は大いに発展した。マンチェスター，リヴァプール，バーミンガム，ニューカースル，グラスゴー等はその典型である。しかし，これらの都市は，戦後の大不況，工業化社会から情報化社会への変化にともない空洞化していった。その後，1980年代のサッチャー政権のもとで，民間を積極的に参入させた再生が盛んに試みられていく。その政策は多くの問題を孕んでいたが，一方でその問題点から，あるいは，その批判から様々なかたちの都市再生の手法が展開していくことになる。その過程において，かつての工業都市は，「文化都市」へのイメージ転換を積極的に行っていった。以下に，その事例のいくつかを，地方都市を中心に示していくことにしたい。

もうひとつのドックランズ

リヴァプールのアルバート・ドック

ドックランズは，ロンドン南西部の旧港湾工業地帯の再生地区であり，民間資本の誘引を目的としたサッチャー時代の国家的プロジェクトとしてもよく知られている。ドックランズほど規模は大きくはないが，同様のアプローチがとられたのが，かつて国際港として栄えたリヴァプールであり，その中心市街地に隣接するアルバート・ドック再開発は，「成功例」として当初は注目された。ドックの水辺を囲む旧倉庫群を，美術・博物館施設，ショップ，レストラン，ホテル等に転用し，水上のイヴェント等もできる多彩な機能を持ち合わせた地区として1983年にオープンした。しかし，今や空きテナントの方が目立つ。これは，この再生プロジェクトが，市民や地元自治体の積極的な関わりがえられないまま推し進められたドックランズと同様の「中央政府直轄型」であり，地元の問題意識を鼓舞することに欠けた結果とも言える。

マンチェスターの重層的街並み

イギリスの再生計画は，リヴァプールの例にみるような「中央政府直轄型」から，徐々に地元自治体と中央政府がコミュニケーションを取りながら進められていくようになる。その一例をマンチェスターにみることができる。道路沿いに連なるヴィクトリア建築群がつくる街並み，加えて，かつて綿製品を運んでいた運河とそれに沿って立ち並ぶ倉庫群の再生により，重層的な街並みができあがっている。運河再生においては，英国水路協会（British Waterways）が民間セクターとパー

トナーシップをとりながら展開したものである。国内の水路風景の殆どの再生には，この協会が関わっているのだが，とりわけ，マンチェスターの例は，運河が街の中心部を縦横に流れているため，それを活かすことにより街並みに連続性が形成され，市内各地区の有機的つながりを強めた好例としてあげられる。

グラスゴーの実験的再生

グラスゴーは，マッキントッシュをはじめとするグラスゴー派の拠点としても知られる街である。そうしたかつて芸術やデザインの遺産をキーとして街の文化的要素をアピールし，脱工業都市をねらった。同時に様々な国際的なイヴェントを誘致し，中央政府よりもむしろEUとの関係性を重視していった。1990年の「欧州文化都市」に選ばれた点がそのことを象徴している。以降，様々な文化祭典を開催し，その活気が市民の自信と誇りを回復させることにもつながっている。前掲の事例と同様に，グラスゴーにおいても廃屋の再生がみられ，イギリスで一般的な外壁を保存する手法（Development Behind the Retained Facade）を用いている。しかし近年では，そうした「保存再生」に加えて，新建築によるいくつかの実験もみられる。その一つが「未来の住まい（Homes for the Future)」プロジェクトである。中心市街地からほど近い一地区でこのプロジェクトが進められた。この地区は，利便性の高い場所ではあるが，所謂「イースト・エンド」のイメージから放置されてきたところである。そこに「未来の住まい」を掲げ，現在世界的に活躍しているロン・アラッドやトム・ディクソン等10組のチームによる作品を建設し，99年の文化祭典（U. K. Architectural & Design Year）の一つとして公開された。現在は，一般の住まいとして機能している。このプロジェクトは，新しい住まいのありかたを提案するのが根本にあるが，同時に，新しいデザインの風景をこの地区に導入することにより，かつてのこの地域に対するイメージを変え，また，こうしたデザインを求め，それを購入できる経済力のある層が，この地区に住むことによって，イギリスに根強い地区と社会層の関係性を崩壊させるものである。現在は，この地区の展開として，近隣地区の整備が進められている。

バーミンガムとエスニシティ

イギリスの都市が抱える大きな問題の一つが「エスニシティ」である。しかし，その歴史が長いだけに，また，今やイギリスという国家を築きあげてきた要素として欠かせないものだけに，「異なる」要素に対する「尊重」のスタンス，あるいは，「違う」ことに対する「誇り」もできつつある。バーミンガムは特にインド系住民が多い街として知られており，市の南部にはインド系の住宅地区がある。当然のことながら，そこには住民のための住民によるインドの食材や日用品を扱う店が多いわけであるが，近年それを対外的に「インド文化に出会う街」として商業活動を活性化させ，市の主要な観光資源ともなっている。現在では，この地区の存在を認識させるV. I. 計画が進められている。こうした例にみられるように，その他の都市においても，かつての社会的マイノリティーの文化，例えばゲイや移民の文化等を，都市の文化的特色の一つとして積極的にとらえ，各々の都市文化の豊かさを示していく方向にある。

このようにイギリスの都市再生には，必ず人を含めた都市の文脈が読み込まれている。そして，その点こそが，我が国の再生論に欠如している点ではないだろうか。今回は，イギリスのいくつかの事例を紹介したにすぎないが，詳細については，稿を改めて一都市ずつ報告していきたい。